

観自在

弘長寺寺報
第十二号
平成十八年
一月

またもやお宝ザツクザク

弘長寺住職 森田裕光

明けましておめでとうございます。

本年もよろしくお願い申し上げます。

去年は、お陰様で念願の阿弥陀堂を建立することができ、改めて感謝申し上げます。

ご法事の際、お寺参りの最後に阿弥陀堂にてご先祖位牌の前で読経をするのですが、ご親戚の方々はどなたも声を揃えて感嘆の声をあげられます。

最近はその声を聞くのが楽しみの一つとなっています。

県重文指定に向けての製本作業も順調に進み、三月末には出来上がる予定です。

さて昨年末、特別浄財喜捨を賜りましたので、阿弥陀堂ばかりリニューアルしては申し訳ないとの思いから、本尊様（聖観世音菩薩）の周辺飾り（法被・須弥壇打敷・前机打敷等）を新しく取り替えました。

普段は法被がしっかり貼り付けてあったことと、畏れ多い思いもあり、法被の入り口周辺しか浄巾拭きをしていなかったのですが、その法被を外した本尊様の奥から何と多数の棟札が出てきたのです。

本堂の棟札は屋根裏にあるもので、二十年前の屋根替えと天井修理でも、その存在を当時の私は全く認識していなかったもので、無いものと思いきやありました。

東堂様が発見後保管をして、修理後に本尊様の奥に置

かれたのだと判りました。

結局本堂は七世中興梵應泰音大和尚代、安永二年（一七七三年）に改築されたものと判明、二百三十三年前の建物です。その棟札は二枚あり、もう一枚は喜捨名が裏表にビッシリ書いてありました。

全部お米の喜捨で、お米を集めてお金に換金したのではないかと古文書解読の松本先生は話されています。

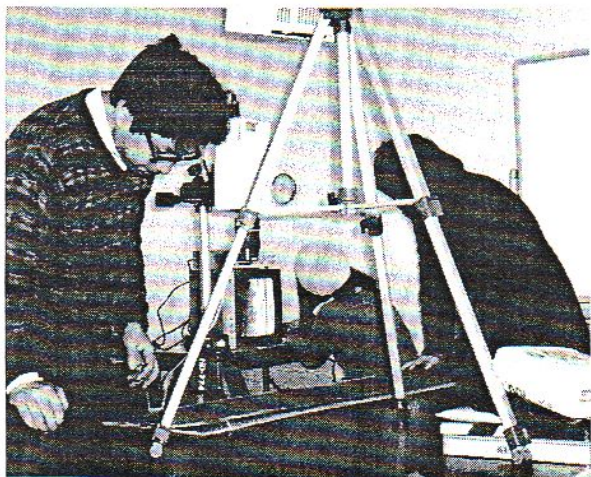
私などは素人考えでメインの棟札（改築経過が漢文でかかれていた）の方が重要だと思いの、先生は「こちらの方がすごい」と喜捨名札に感激され、そちらから解読が始まり、薄れて読めない箇所は博物館にてX線照射にて解読をされました。（一月十七日）

墨が薄く判読難解な秋葉堂の棟札も博物館で見ているだけ、八世泰山大安大和尚代の改築と判明しました。

経筒の中の写経の紙を、安部榮四郎記念館の安部己図枝先生を通して、四国で化学分析をお願いしました。

素材は「こうぞ」百パーセントだそうです。

安部先生にも原稿をお願いいたしました。出版に間に合うように次々とお宝が出現するのも、阿弥陀様のお陰だと思っております。



X線にて解読中の松本先生、県立博物館にて



安部榮四郎氏の孫、己図枝先生が島大名譽教授・錦織農学博士と共に来山、写経の紙に感嘆される

新年のご挨拶

弘長寺護持会
会長 武田民三

檀家の皆さまには、ご家族をお揃いにて清々しい新年をお迎えのことと心からお慶びを申し上げます。

例年正月三が日の早朝五時から当山にて厳修される大般若会に、今年もお参りし、大般若の転読功德力を授かり、眞にありがたい気持ちで新年を迎えることができました。

昨年は、皆さまの総力が結集され、積年の阿弥陀堂改築事業が完成いたしました。阿弥陀像とその胎内銘及び経筒の記録集編纂作業も順調に進めていただき、タイトルも金寶山弘長禅寺「阿弥陀如来座像」と決まり、年度内には発刊の運びとなる予定であります。

大聖東堂さまの退董の儀など十八世大心裕光方丈さ

まの晋山式を併せ、これら大事業の遂行は、檀家の皆さま、役員の方々の力強いご支援の賜と、新年を迎え改めて心から感謝を申し上げる次第であります。



今年、平成十八年度は弘長寺護持会役員改選の年であり、

護持会会則第七条の規定に従い、地区委員をはじめ、各役員が選出されることとなっており、

各地区におかれましては、会則第五条の定めるところにより、地区の皆さまにはそれぞれにご協議のうえ、年度内にはご選出を賜りますようお願い申し上げます。

当山本堂は、安永二年（一七七三年）三月、七世

中興梵應泰音大和尚代に建立されたことが最近発見された棟札により確認されて

いますが、二百三十年余も経過した古い建物であり、天井や壁が相当傷んでおり、こともさりながら、耐震能力が極めて気がかりな建築物であるとの指摘も受けております。

新しくご就任の委員様方には、十分ご配慮をいただかねばならない重要な問題と思われ、

ちなみに庫裡の耐震補強工事は、昨年のもので法人並びに森田家にて対応していただいているところであります。

ところで、わたくしども檀家の組織である弘長寺護持会は、長い歴史はありましたが、近年まで会則もなような形だけの団体でありました。

平成十二年四月一日に協議のすえ、弘長寺護持会会則を制定していただき、その後、数次に亘り改正がなされ、開放された組織となりました。

檀家制度は、中世末頃に社会制度化したもので、徳川幕府の民衆支配の末端部

分を担うことにもなり、したが、幕府崩壊後も存続しつづけ、今日に至ったものとされていきます。

ご高承のように檀は梵語の音写で「檀那」あるいは「檀越」の略といわれ、「布施」とも訳され、喜捨すること、与えほどこと、信者が僧侶に施物を供養することであり、菩提寺（檀那寺）の堂宇建築や修復、あるいは寺院経営の費用を負担することが、我が護持会会則第二条にも謳われているところであります。

どうか新しい役員構成のもと、檀家の皆さまの愈のご精進ご研鑽あらんことをご祈念申し上げます。

合掌



